

機械翻訳を活用した英文ライティング能力の向上：授業実践の報告

Using Machine Translation to Improve English Writing Skills: A Practical Report

永井 誠¹⁾

Makoto Nagai¹⁾

Abstract : The accuracy of machine translation has improved significantly in recent years. There are both positive and negative opinions on whether machine translation can contribute to the teaching of English composition. This paper reports on how the author used machine translation in English IV classes at the Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology.

Keywords : Machine Translation, English Writing Skills, Preparations

1. はじめに

ここ数年急速な進歩をし続けている機械翻訳に関しては、英語教員・英語学習者から様々な意見・見解が出されている。英語教員からは、「英語が苦手な学生の発信力を向上させる（小田(2018)ほか）」「その利用意義は大きい（藏屋(2019)ほか）」「英語教育におけるその効果は生身の教員を凌ぎ、取って代わる可能性がある（山中(2019)ほか）」「学生にはその使用を控えさせる指導も必要（小田(2019)）」「訳出困難な文法項目もある（徳永(2020)）」「自力での英作文と組み合わせる利用するのが望ましい（山本(2020)）」「様々な誤翻訳の分析とそれらへの対処法を検討すべき（森ほか(2021)）」などの声が聞かれる。筆者が授業を担当する低学年の学生からは「これからは DeepL さえあれば英作文の授業は要りません」「英作文の課題が出されたら即 DeepL に頼ります」という意見や告白が聞かれた。

筆者は、機械翻訳の翻訳能力の限界を意識した上で英文ライティングの指導におけるその利用価値を認め、うまく工夫をすれば学生がそれに（まるごと）頼ることなく英文ライティングに取り組み、その能力を向上させることができると考え、2019年度から授業に取り入れている。本稿では、東京都立産業技術高等専門学校（以下「本校」）2022年度の英語Ⅳの授業における具体的教材や成果を示し、授業実践として報告する。

2. 「下地」としての事前指導

既に機械翻訳に頼っている学生に対して突然「機械翻訳に頼らず自力で英作文をきなさい」と言っても、学生がそれに従い、かつ効果を上げるとは考えにくい。そのため、この指導の前には前段階として前年度から本年度前期まで

に以下の3つを理解するよう指導した。

- (1) 英文の基本構造分析法
 - (2) 英文の基本構造構築法
 - (3) 日本語の発想法と英語の表現法の違い
- 以下、それぞれについて簡潔に説明する。

2.1 英文の基本構造分析の指導

前年度第3学年の英語Ⅲにおいて、次項「英文の基本構造構築法」のための前段階として構造分析の指導を行った。ある構造を構築するにはまずその構造自体を理解しなくてはならず、そのために、基本構造の代表的パターンを示し、分析練習を行った（永井(2010)参照）。英文の最も基本となる単文は主語＋述語のペア（以下、「SV ペア」とする）であり、複雑な構造の英文はそのペアを同レベルで組み合わせたり、主語や述語の内部に小さな SV ペアを組み入れてできているということを理解させた。また、ペアの組み合わせ方の代表的パターンを表にして示した（参考資料「SV パターン表」参照）。

2.2 英文の基本構造構築の指導

第4学年の英語Ⅳに入り、学生に自分が表現したい内容を英文で表現するには「SV パターン表」のどの構造が適切であるかを考えさせ、英文構築の練習をした。その際には、構造パターンのバリエーションとして、筆者が「There＋BE 存在文」と呼ぶ倒置文（「～がいる」「～がある」）や、「サブ＋メイン文」の変形としての分詞構文（V'ing, S+V）の練習に力点を置いた（永井(2011)参照）。

¹⁾東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科目

2.3 日本語の発想法と英語の表現法の違いに関する意識昂揚

前項「英文の基本構造構築法」の教材の中に、「～は」「～が」の扱い・主語の設定法・無生物主語・仮主語の説明を入れ、和文英訳の際に日本語からの直訳をしないよう指導した。その後修正した教材を参考資料「主語と「は」「が」に関する教材」に示す。

第3学年および第4学年前期までのこれら一連の指導を行い、学生が英作文の練習問題に対応できるようになったことから、学生は事前に自分の英文ライティング力にある程度の手応えを感じ、機械翻訳を活用した英文ライティング向上の下地ができたと思われる。

3. 2022年度の指導実践

2022年度夏期休業以降に以下の3段階の指導を行った。

- (1) 自力+機械翻訳の英文ライティング～今後の指導の案内
 - (2) 機械翻訳の誤訳例の分析（その能力の限界を認識）
 - (3) 日本語の工夫+機械翻訳の英文修正の練習
- 以下、それぞれについて説明する。

3.1 8月の指導：目的と必要性について

夏季休業中に自由英作文の課題を課し、自力の英作文（クオリティー問わず）と機械翻訳の英文とを比較させ、両者を並行して行うことによって英文ライティング能力を向上させられることを説明した。この際、機械翻訳の使用を控えるのではなく積極的に活用してよいことと、そのためには自身の英語力が元になること、そして結果的に自身の英文ライティング能力向上の繋がることを説明した（PDF教材の内容を参考資料「教材1」として示す）。

3.2 9月の指導：基本的考え方・機械翻訳の限界について

最初にこの指導の基本的考え方を以下の通り示した。

- 1) 機械翻訳を活用するには英語力と日本語力が必要。
- 2) 機械翻訳を活用するトレーニングをすると自身の英文ライティング力も向上する。

次に1)の理由付けとして、機械翻訳の能力の限界を示し、自身の英語力を元に修正する必要があることを、実例を示しながら説明した。例として本校のホームページの文章を、多くの学生が多用しているDeepLを使って英訳した場合の問題点とその修正例を示した。また、「参考」として、さらに多くの問題点を含む本校ホームページの実際の英文ページ（翻訳方法未公表）と、その問題点及び修正例を示した。

DeepL 翻訳の問題点として以下の点を挙げた。①「高専」を「高等専門学校」の省略語として訳していない、②ある名詞を修飾する修飾語句が別の単語（動詞）を修飾対象と誤認している、③（日本語そのままに）英語に存在しない表現を使っている、④固有名詞の訳を間違えている（知らない）。

また、参考として本校HP英文ページの誤訳例も以下の通り示した。①日本語に存在しない「We」という主語が勝手に付与されている（意味不明）、②「高等専門学校」が「高等職業学校」と訳されている、③「hereafter」が「以下の通り」と（単純に）誤訳されている、④「高専」を省略語として訳していない、⑤固有名詞の訳を間違えている（知らない）、⑥過去の状態を表す文に現在形を使用している（事実と異なる）、⑦複数ある主語に対して述語が単数形になっている、⑧「～が存在している」という内容を表すのに「～がインストールされている」という意味不明の表現を使っている。

これら二つの例により、進歩している機械翻訳は現在でも決して万能ではなく、使用者が自身の英語力を元に文を確認及び修正する必要があるということが理解されたと思われる。

加えて、今回の教材における練習課題として同じ日本語を（DeepLと並んで多用されていると思われる）Google翻訳を使った翻訳文を示し、学習者にその英文の確認及び修正をさせた（教材2参照）。

3.3 10月の指導：機械翻訳活用の練習

DeepL 翻訳文の修正例の紹介・説明、Google 翻訳文の修正練習を経て今回の指導では、学習者自身が8月に書いた自力英作文と機械翻訳の英文（未修整）に立ち帰り、以下の2つの面に留意しながら改めて機械翻訳活用の練習をさせた。

- (1) 機械翻訳に掛ける日本語の工夫・見直し
- (2) 翻訳文の確認・修正

森ほか(2021)は機械翻訳の能力の限界を示すためにGoogle 翻訳の誤訳例を詳細に記述しており、それらの項目は翻訳結果確認の際のチェックポイントとなり得るが、学習者に提示するにはあまりに多岐にわたり、且つ専門知識も必要とすると思われる。そのため筆者の指導においては、頻繁に見られ、かつ意味的に致命的になり得る誤訳ポイントを以下の5点に絞り、チェックポイントとした。

- ①主語（動作主）の設定、述語との対応
- ②述語の形（数・時制・態など）
- ③複合文の論理構造（接続詞の選択）
- ④簡潔・明瞭さ（1文の長さ、修飾/被修飾の関係、など）
- ⑤語彙・名称（専門用語・固有名詞）

学習者の具体的な作業としては、上記のポイントにおいて適切な英文をイメージしながら、そのような英文になるように、機械翻訳にかけた日本語を修正し、翻訳結果の英文を（同じく）上記のポイントに基づいて修正したものを提出させた。併せて、日本語をどのように工夫したか、英文をどのように修正したかを箇条書きにして報告させた（教材 3 参照）。これにより、曖昧な日本語として自分の頭の中にある「意味」を英語の「かたち」で適切に表現する際にどのような道筋を通ったかを、学習者自身に言語化させたことになるとと思われる。

4. 指導の効果

前項教材 3 の最後の部分の課題（日本語の工夫・英文の確認～修正）で、学習者がチェックポイント①～⑤のどの部分に留意・実践したかを以下の表で示す。これら 5 項目以外にも様々な工夫が見られ、それらも表に追加した。この表は有効回答と言える学習者 98 名の報告を元に作成した。なお、各学習者が複数の項目について報告しているため、合計は「98 名」や「100%」とはならない。

表 1 学習者が留意・実践したと報告した項目

項目	人数	%
①主語（動作主）の設定、述語との対応	50	51.0
②述語の形（数・時制・態など）	11	11.2
③複合文の論理構造（接続詞の選択など）	24	24.5
④簡潔・明瞭さ（1 文の長さ、修飾／被修飾の関係、など）	62	63.3
⑤語彙・名称（専門用語・固有名詞）	34	34.7
ほか		
よりニュアンスの近い語句・表現への変更	53	54.1
未訳部分の補充	10	10.2
前置詞の修正	5	5.1
副詞の修正	5	5.1
関係詞の追加	3	3.1
単文ごとに分割して英訳し、後に結合	3	3.1
単数／複数の修正	3	3.1
（訳文の）文法ミスの修正	2	2.0
冠詞の追加	2	2.0
（意味の）誤訳の修正	2	2.0
複数の翻訳ツールで訳出結果を比較	2	2.0
品詞の変更	1	1.0
慣用句の使用	1	1.0
訳出結果を逆和訳させて意味を確認	1	1.0
代名詞の変更	1	1.0
肯定文の表現で否定の意味を表現	1	1.0
文の順序の変更	1	1.0
引用符の工夫	1	1.0

過半数の学習者が留意・実践したと報告したのは 3 項目で、(1)「主語の設定・述語との対応」(2)「簡潔・明瞭な文章」(3)（翻訳後に）「よりニュアンスの近い語句・表現への変更」であった。そして、「語彙・名称（専門用語・固有名詞）」「複合文の論理構造（接続詞の選択）」が続いた。

5. 結論

前項表 1 の報告から分かる通り、これら一連の指導を通して学習者は、適切な英文をイメージした上で適切な日本語を機械翻訳にかけた方がより適切な訳出結果が得られることを認識したと思われる。同時に学習者は、適切な英文をイメージするため、及び訳出結果を確認・修正するためには英語力が必要であることも認識したと思われる。当然、適切な英文をイメージする練習は自力で英作文をする際にも有益である。

実際、多くの学習者が機械翻訳に頼らず、自力で主語と述語の組み合わせを設定したり、適切な接続詞を用いて複合文を構築したと報告している。また、訳出結果を確認する際のチェックポイント①～⑤は、そのまま自力英作文のチェックポイントになる。これらのことから、（事前指導で「下地」を作った上で）機械翻訳を活用することは英文ライティング能力の向上に寄与すると考えられる。

参考文献

- [1] 浅野享三：人工知能時代の外国語教育，南山大学短期大学部紀要，終刊号，pp.95-105，2018
- [2] 小田登志子：翻訳アプリについて語学教員は何を言うべきか，公益社団法人私立大学情報教育研究協会 平成 30 年度教育改革 ICT 戦略大会，2018
- [3] 小田登志子：機械翻訳と共存する外国語学習活動とは，東京経済大学，人文自然科学論集，145 pp.3-27，2019
- [4] 蔵屋伸子：英語ライティング指導における機械翻訳サービスの利用意義—実践に向けた移行準備として，国際情報研究，16-1，pp.24-35，2019
- [5] 徳永博：自動翻訳機が訳出困難な学習英文法の項目に関する一考察，立命館言語文化研究，32-2，pp.45-63，2020
- [6] 永井誠：「SVK リーディング」：高等専門学校高学年学生のためのアウトライン・リーディングの提案，東京都立産業技術高等専門学校研究紀要，4，File 15，2010
- [7] 永井誠：「SVJ ライティング」：高等専門学校高学年学生のための英文ライティング指導法の提案，東京都立産業技術高等専門学校研究紀要，5，File 15，2011
- [8] 成田一：自動翻訳の高度化と英語教育，JAPLO YEAR BOOK 2019，pp.264-273，2019
- [9] 西島佑：機械翻訳は言語帝国主義を終わらせるのか？そのしくみから考えてみる，AGLOS Special Issue: Workshop and Symposium 2016-2017，pp.1-24
- [10] 森和憲，佐竹直喜，服部真弓ほか：機械翻訳を利用した自由英作文における誤用分析，全国高等専門学校英語教育学会研究論集，40，pp.31-40，2021
- [11] 山中司：大学にもう英語教育はいらない—自身の「否定」と「乗り越え」が求められる英語教育者へのささ

やかなる警鐘, 立命館人間科学研究, 38, pp.73-89,
2019

[12] 山本淳子: 英語教育における機械翻訳の役割, 大阪女
学院大学・大阪女学院短期大学 教員養成センター<英
語教育リレー随想>, 121, pp.1-2, 2020

参考資料

「SV パターン表」

主語・述語から見た文構造の代表パターン (まとめ)

A. 単独文 (ワンペア文)

- A1 [S + V] : 基本型
A2 [V + S] : 倒置文 (there BE 存在文, 文体上の工夫) ※後ろに主語
A3 [S' + V + S] : 仮主語文 (真主語 = to 不定詞～)

B. 節を内包する単独文: 「文の中に文」

- B1 [(S (s) + (v)) + V] : 主部に節を含むもの
B2 [S + V ((s) + (v))] : 述部に節を含むもの
B3 [(S (s) + (v)) + V ((s) + (v))] : 主部と述部の両方に節を含むもの
B4 [S' + V + S ((s) + (v))] : 仮主語文 (真主語 = that 節)

C. 複合文: 文と文との組み合わせ (☆は接続詞の位置)

- C1 [S + V], ☆ [S + V] : 単純並列型 (接続詞が and や but など)
C2 [☆ s + v], [S + V] : 前置修飾型 (サブ文→メイン文)
C3 [S + V], [☆ s + v] : 後置修飾型 (メイン文←サブ文)

D. 実質上の複合文 (分詞構文) : サブ文の主語と接続詞が省略されていると考える。

- D1 [現在分詞 V' ~], [S + V] ⇨ 前置修飾型複合文
[S + V], [現在分詞 V' ~] ⇨ 後置修飾型複合文
D2 [過去分詞 V' ~], [S + V] ⇨ 前置修飾型複合文
[S + V], [過去分詞 V' ~] ⇨ 後置修飾型複合文

E. 節を内包する複合文 (上の組み合わせ: 多数)

主語と「は」「が」に関する教材

「主語」に関する留意事項

- (1) 日英語比較: 日本語の「～は」「～が」は「主語」ではなく「トピック」を表すことが多く, 英文では主語ではなく目的語や場所など様々な要素になり得る。逆に, 日本文には表れていない意味要素が英文の主語となるケースもある。その場合は日本語の主語を補って考える必要がある。
(2) 空(から)主語: 時間・天候・雰囲気などを表す時には, 実体のない「It」が主語となる場合がある。(「それ」でない it)
(3) 無生物主語: 英語の場合, 日本語では主語にならないようなモノ/コトなどの無生物が主語になる場合がある。

教材 1

夏期休業中の課題	
<p>100～150 語程度の自由英作文 トピックは, 自分と工業・工学に関連があれば何でも良い。(自分が気に入っている工業製品など) 提出物(クラスルームへ写真をアップする)</p> <ol style="list-style-type: none"> 和文原稿 自作の英訳文 機械翻訳を使った英訳文(自分で修正せず, そのまま)※電子データで残しておくこと 	<p>最近の機械翻訳は精度が上がり, 「それを使うなら英語学習に英文ライティングは不要ではないか」「学習者は機械翻訳に頼るので, ライティング練習をしても英語力は上がらない」などと言う声が聞かれます。 しかし, 英語学習に英文ライティングは必要です。理由はいくつかあります。 ・機械翻訳は万能ではない: 英語力と「ライティング」自体のセンスがないとそれが活用できない(誤訳や不自然な英文でも気づかない)。</p>

・機械翻訳はいつでも使えるわけではない:即時に英文を書かなくてはならない場面もある。
 ・ライティングができない人はスピーキングもできない:自分の頭で英文を作れなければコミュニケーションができない。
 では機械翻訳や使わない方が良いでしょうか?
 →機械翻訳は、使い次第では英語力向上に大変役立ちます。今後の活動で、その活用法を身につけていきます。

p. 3

教材 2

機械翻訳の活用①

結論:

- 1) 機械翻訳を活用するには英語力と日本語力が必要。
- 2) 機械翻訳を活用するトレーニングをすると自身の英文ライティング力も向上する。

活動全体の流れ:

- ①機械翻訳の特徴・限界を知る。
- ②自分の英語力と日本語力を元に確認・修正する必要性を理解する。
- ③要注意ポイントの例を参考に、英文を修正する
 ☆自力作文と機械翻訳を比較し、「いいところ取り」をする。←機械翻訳が正しいとは限らない。
- ④より高度な活用法を習得する。

多くの人が信頼して使用している DeepL の翻訳例を見ている。数年前に比べると飛躍的に信頼性が増しているが、万能ではないことが分かる。

例として、本校 HP の「高専とは」の冒頭部分を英訳させた。

p. 1

p. 2

本校 HP「高専とは」部分 元文(第一段落):

1955 年代から始まった、我が国の目覚ましい経済成長を支え、科学・技術の更なる進歩に対応できる技術者養成への産業界からの強い要請に応じて、1962 年に初めて高等専門学校(以下「高専」)が設立されました。この時に国立 12 高専とともに、公立高専として東京都立工業高専と東京都立航空工業高専の 2 高専が設立され、現在では全国に 57 校の高専が設置されています。

DeepL による英訳:

Technical colleges of technology (hereafter 'technical colleges') were established for the first time in 1962 to support Japan's remarkable economic growth, which began in the 1955s, and to meet the strong demand from industry for the training of engineers who could respond to further advances in science and technology. Along with the 12 national technical colleges, two public technical colleges, Tokyo Metropolitan Technical College of Technology and Tokyo Metropolitan Aviation Technical College, were established at this time, and there are now 57 technical colleges in Japan.

p. 3

p. 4

問題点

①(知識がないため)「高等専門学校」「高専」ともに不適切。(省略語の「高専」は英訳しようがない。)②元文の「～経済成長を支え」の部分は「技術者」を修飾しているはずだが、「～設立され」を修飾していると誤解している。③元文の「1955 年代」という不適切な表現をそのまま(英語では存在しない)「1955s」と訳している。英語で言うとしたら「1950s」で、1950～1959 の 10 年を表す複数形 s が使われる。(元文を「1955 年頃」と解釈すべき。)④「都立高専」「航空高専」の英語名称を知らない。

修正後:

Colleges of technology (hereafter 'Kosens') were established for the first time in 1962 to meet the strong demand from industry for the training of engineers who could support Japan's remarkable economic growth which began around 1955, and could respond to further advances in science and technology. Along with the 12 national Kosens, two public Kosens, Tokyo Metropolitan Technical College and Tokyo Metropolitan College of Aeronautical Engineering, were established at this time, and there are now 57 Kosens in Japan.
 問題点①～④がどう修正されているか、確認して下さい。

p. 5

p. 6

<p>(参考) 本校 HP の英文ページ: 順番は前後するが、本校 HP の英文がどうなっているか見てみよう。 <u>We supported remarkable economic growth of our country which began in the 1955s, and, in response to strong request from industry to the engineer training that could cope with further progress of science, technique, higher vocational school (as follows "technical college") was established for the first time in 1962. At this time, with 12 national technical colleges, 2 technical colleges of Tokyo Metropolitan industry technical college and Tokyo Metropolitan aviation industry technical college are established as public technical college, and 57 technical colleges are installed in the whole country now.</u></p>	<p>問題点: ① 元文にないはずの主語「We」が勝手に付けられている。→「～支える」「～対応する」の主語は「～技術者」なのに、正体不明の「我々」になっている(They もよく使われる)。②「高等専門学校」が「高等職業学校」になっている。③()内の「以下」(hereafter)が、「以下のように」(as follows)と誤訳されている。④省略語の「高専」は英訳しようがないので Kosen とすべき。⑤「都立高専」「航空高専」の正式英語名称を使っていない。⑥(設立当時の高専数を表す日本語の述語が現在形なので)英文では現在国立 12 と公立 2 の高専があることになっている。⑦「公立高専として」の部分: 複数の主語に対して単数で受けている。⑧最後の「設置されている」は「存在している」の意味なのに、装置や機能向けの「インストール」という動詞を使っている。</p>
--	---

p. 7

p. 8

<p>練習問題 (課題) 同じ日本語を Google 翻訳に英訳させてみた。 DeepL と本校の例を参考に、問題点を指摘しなさい。 (共通の問題点もあります。) 問題点をノートに列挙し、写真を撮ってクラスルームの該当ページに提出すること。</p>	<p>Google 翻訳による英訳: In 1962, in response to the strong demand from the industrial world to support Japan's remarkable economic growth, which began in the 1955s, and to train engineers who can respond to further advances in science and technology, the first technical colleges (hereinafter referred to as technical colleges) were established in 1962.) was established. At this time, along with the 12 national technical colleges, two public technical colleges were established: the Tokyo Metropolitan Technical College and the Tokyo Metropolitan Aviation Technical College, and today there are 57 technical colleges nationwide.</p>
---	--

p. 9

p. 10

教材 3

<p style="text-align: center;">機械翻訳の活用②</p> <p>今回の内容 1) 機械翻訳①の練習問題 (Google 翻訳の問題点) の解答 2) 機械翻訳②の課題: 夏期休業中に作った英文を改めて「翻訳」し直して提出する。 提出物: (1) 夏休みのファイル 3 点 (日本語, 自力の英作文, 機械翻訳の英作文), (2) 新しい英文, (3) どんな工夫をし、何をどう直したかの説明 (箇条書き) → どのような技能を身につけたという「アピール」となります。 写真ではなくファイルで。</p>	<p>前回課題 (Google 翻訳の問題点) の解答 In 1962, in response to the strong demand from the industrial world to support Japan's remarkable economic growth, which began in the 1955s, and to train engineers who can respond to further advances in science and technology, the first technical colleges (hereinafter referred to as technical colleges) <u>were established in 1962.</u>) was established. At this time, along with the 12 national technical colleges, two public technical colleges were established: the Tokyo Metropolitan Technical College and the <u>Tokyo Metropolitan Aviation Technical College</u>, and today there are 57 technical colleges nationwide.</p>
---	---

p. 1

p. 2

<p>①元文の「～経済成長を支え」の部分は「技術者」を修飾しているはずだが、「強い要請」を修飾していると誤解している。②元文の「1955 年代」という不適切な表現のせいで、英語では存在しない「1955s」という表現が現れている。元文を「1955 年頃」と解釈すべき。③元文の() を理解できず、英文構造が破綻している→述語の-established が 2 回 (複数扱い+単数扱い)。④「高等専門学校」「高専」ともに不適切。「高専」は英訳しようがないので Kosen。⑤「航空高専」の英語名称を知らない (工業高専は合っている)。 ※1 行目: 「～界」を「～world」と言う必要はないですが、言っても良いようです。</p>	<p style="text-align: center;">今回の作業 (課題)</p> <p>次の 2 ページの注意点を参考にして、 ① 日本語を工夫して (見直して) 機械翻訳に掛ける。 ② 翻訳された英文を確認～修正する。 ③ どのような工夫・修正をしたかを箇条書きにする (①②に関して)。</p>
--	--

p. 3

p. 4

作業の注意点 日本文の工夫

☆英文を意識・予想して日本文を作る.

・主語：意図した主語が推測できるように.

なし →we や they が (勝手に) 補われてしまう.

「が」「は」は主語以外に様々な役割があり, 要注意.

・述語：適切なかたち (時制や態) が選ばれるように.

文末の述語動詞が不定形 (原形) →時制が推測不能.

「歴史的現在」 (過去の文脈で現在形) →現在時制と誤解される.

・接続：英文が簡潔・明瞭になるように.

主語+述語 (SV) のペアが基本的に 2 ペアまでになるように. 論理関係 (「~ので」「~にも拘わらず」など) を明確にし, 適切な接続詞が選ばれるように.

順接の「だが」は使わない. →適切な接続詞を選べない (逆接と誤解される.)

過度に長い単文 →何が何を修飾するのか理解できない (名詞を修飾する形容詞句なのか, 動詞を修飾する副詞句なのか, など.)

作業の注意点 英文のチェック~修正

☆機械翻訳の利用は「仮翻訳」と位置づける: 信用してはいけない. →自身の英語力を元にチェック~修正して初めて「翻訳」したことになる.

文構造:

・主語, 述語, 接続詞は自分が意図した通りになっているか?

・一文の SV ペアは (基本的に) 2 ペア以内になっているか?

・修飾/被修飾の関係は適切か?

語彙:

・固有名詞, 個人的知識・特定業界の専門用語は適切か? (自力の英作文を元にして)